

wake up

流星群。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一昔前、強大過ぎるちから故に封印された四振り of 刀があった。

その刀の名は「四獣刀」。

突如ちからを手にした少年はなにを想い行動するのか。

原作に沿いながらもオリジナルでやっていきます

# 目次

目覚める獣

1

第2話

11



# 目覚める獣

「…きろ。」

なにか聞こえる。

「おきろ。」

頭のなかに響くような不思議な感覚だ。

急に辺りが鮮明になり自分の状況を把握する。

「うおっ！なんだこれっ！」

自分の周りは木が生い茂っている森のようだが少し前方は全ての木々が燃えていて火山もある。境界線がはっきりしていて自然に出来たも

のとは思えない。

「ようやく来たか。」

火山の方から人影が近づいてくるのがわかった。

髪、瞳が炎のような赤い色をしており頬には一筋の傷が縦に入っている。

180位の身長で赤黒いスーツのような格好をしてこちらへどんどん向かってきている。

こちらが戸惑っているのを他所に話しかけてきた。

「我が名は××」

ん？何て言ったんだ？

「そうか、まだ聞こえぬか。まあいい。次は聞こえることを祈ろう。だがもう驚異はそこまできている。」

薄れ行く景色のなかでなんとなく話を聞いていた。  
このあとに起こる事件のことを何も知らずに…。

「…モモンガ！」

つて、なんの夢見てたんだ俺は。

寝癖がひどい頭をかきながらベットから降り、

カーテンを開け、日差しを浴びながら伸びをする。

これが俺の毎朝行うルーティンだ。

とても目が覚めるんだよなー。

おつとここで自己紹介！

姓は美波（みなみ）

名は流星（りゅうせい）

性別男 髪の色は焦茶で17才の高校2年生だ。

自分で言うのもなんだかルックスも成績もまあまあ。

運動神経は学校でもトップレベルで通知表はいつも5が体育のところについている。

そんなことより準備しないと学校に遅れちゃうな。

いろいろ端折り、家を出て通学路につく。

「おはよー!!!」バシンー!

朝から思いつき背中を叩かれた。

こいつの名前は志水 夏燐（しみず かりん）

小・中・高と一緒に幼馴染。

ポニーテールが良く似合う元気系の女の子だ。

容姿もとても整っており、原作の茜那をイメージするとわかりやすい。

「おはよーさん」

俺は気だるそうにあいさつを返す。

「なにになー！暗くない？せつかく天気いいんだから気分盛り上げていこーよー！」



さすがに朝からこのテンションにはついていけないな。と思いながら一緒に登校した。

俺たちが通うのは白峰高校（通称・しろこう）

なにかが突出してるわけでもなく、全てが中の上レベルの高校だ。

様々な声が会話をする中、やっと自分の所属する2―2教室についた。

「お、流星！おはー！」

「おはよ、眠そうだね。」

元気そうなのがカズ。もう一人がマサ。

どちらも中学からの付き合いでいわゆる親友というものだ。

「おはよー。そーなんだよ、ねむたくて」

ガラっ「ほらー、席つけー！」

先生が入ってきて早々と各自席につく。

朝のホームルームが始まったところで俺の記憶は途絶えた。

「…きろ」

…

「おきろー!!!」

「うおー!」

とてつもないボリユームの声で無理矢理おこされた。

「なんだ、夏燐か。びつくりさせんなよ。」

「起こさなかつたらいつまで寝てるかわかんないもん!もう放課後だよ?」

まじか。俺昼メシも食わずに爆睡してたのか。ここまで寝れるとは…。

「ほらっ、暗くなつてきてるし帰ろ?」

「おけおけ。準備するわ。」

帰路について5分。ここから当たり前のような日常が大きく変わることになる。

ドカーン!!

他愛もない会話を夏燐としていると公園の方からものすごい音がした。

なにかが落ちたような音だった。

「きやつ、なに?いまの」

「…公園の方からだな。見てみるか。」

「え、いくのー?」

「嫌だったら待つてろよ。いつてくる。」

「ちよつとまつてよー!」

なんだかんだ二人で見に行く。

グラウンドの中心にクレーターのような後があつた。

なんだこれ、なにもないのに、なんの跡だ。

「キヤー!!!」

突如夏燐の悲鳴が聞こえて振り向くとそこには髑髏のような仮面をして全身が白い怪物が佇んでいた。

「夏燐! 来い!」

一目で危険を察知した俺は夏燐を呼び戻そうとした。

だが夏燐は腰が抜けていて立つことも無理なようだ。

俺は急いで夏燐の元へ向かい、おぶつて逃げようとした。

だが向こうも待つてはくれない。

大きな口をあけておいかけてきた。

やばい、やばい。どうする。

危険が迫っているのはわかっている。

だが為す術がない。

体力の限界がきて二人とも倒れてしまう。

「ウォーン!!」

怪物が声を荒らげて近づいてきた。

夏燐だけでも…こいつだけでも助けなきや。

そう思っていたとき

「生きたいか。」

この声、

「生きたいかと聞いている。」

生きたい…こいつを助きたい!

刹那、景色が変わった。

まわりは燃え盛る森。もちろん夏燐も怪物もいない。

そこには俺とスーツの男。

「やつとまともに会話が出来そうだな。」

「なんのことだよ。」

「詳しい話はあとだ。お前は死神になるしかあの娘を助ける手立てがねえ。」

「しに…がみ？」

なにわけのわかんねーこと言ってるんだこいつ。

森の炎の勢いが増してきた。

「はやく、時間がねえ！俺の名前を叫べ！」

「名前がなんだって!？」

「いいから！俺の名前は×あとは流れに身を任せろ！」

景色がもどって目の前には白い怪物、後ろには夏燐。

さっきの状況だ。

助かるには名前を呼ぶしかないらしい。

怪物が腕を降り下ろそうとしてる。

「燃え放たれろ、」

「覇凰（はおう）」

ゴオツ！

一瞬で怪物は炎に包まれ塵となった。

黒い着物を着て、手には真つ赤な刀が握られている。

なんだよ、これ。なにが起こったんだ。

その思考を他所に急にきた眠気に勝てず、また眠りに落ちた。

## 第2話

ん？暖かい。

どこだここ。

重い臉を上げると見覚えのない部屋で横になっていた。

？「やっと起きましたね〜！おはようございます、気分はどうですか？」

流「ん、ああ。問題はなさそうだけど、あんた何者だ。」

？「私ですか？浦原喜助といいます。以後、お見知りおきを。いろいろと話さなきやいけないことがあるんですが、聞く耳持ってくださいます？」

俺は深く頷いた。

死神だの虚だのいろんな言葉がでてきたが

なんとなく概要はつかめた。

大変危険であり封印されていた四振りの刀『四獣刀』の一降りがどうゆうわけか現世の俺に宿ってしまったらしい。

そして、普通ならば霊体の者のみになれる死神に生身の人間のままなってしまったのだ。

言うならば『人神ーひとがみ』だそうだ。

ここであることに気付いた。

流「っ！そういうえば一緒にいた女の子は！無事なのか!？」

浦「あーあの子は無事です。少しだけ火傷を負いましたが、ほんの少しなので問題ないでしょう。」

流「そーか。よかった。」

浦「よかったらあなたの力少しだけ見せてもらえませんかね？」

ー地下にてー

浦「驚かないんですねー、地下にこんな施設があっても、」

流「ああ。もうなんでもありだと思っただとアクションをやめた。」

浦「それはそれは。ま、始めましょうか？解放、してみてください。」

こいつが言うには死神には斬魄刀という刀があり、これらを解放することによって最大出力での戦闘が可能とのこと。



俺は昨日を思いだし、名を呼んだ。

「燃え放たれる、覇凰」

辺りが火の海に包まれ、半端じゃない熱がつつんだ。

右手には柄、鐔、刀身までもが深紅に染まった刀が握られている。

これが四獣刀か。

浦原は圧倒的や四獣刀の力に感動すら覚えていた。

流「いくぞ」

俺は大きく刀を振るった。

炎が三日月状になり浦原へと勢い良く飛んでいく。

自分でもなにをしていいかわからずとりあえず振ってみたのだが、こんなかんじになるとは、、、。

浦「!!これは少しヤバイですね、」

浦原は赤黒い盾のようなものを目の前にだし

飛んでくる炎を防ぐ。

浦「危なかったすね。下手したら死んでたレベルつすよ。少し力の使い方教えな

いとダメっすかね。あれ？」

そんな浦原を他所に俺はまた深い眠りに落ちていた。

俺はこの覇凰をどうにかして使いこなせなければダメらしい。

この四獣刀を目的にしてる輩もいるとかいらないとか。自己防衛のためにも、他に被害者を出さないためにも力を磨くしかない。

俺は決意を固めながらつぎの日の朝を迎えた。